

# アーカイブ 通信 No.22

No.22

2021.7.1

◆編集・発行：  
ネットワーク・市民アーカイブ  
◆tel: 042-540-1663 (事務局)  
tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)  
E-mail: simin-siryo@nifty.com  
www.c-archive.jp  
〒190-0022 立川市錦町 3-1-28-301 (事務局)  
◆正会員 1 口 6,000 円、賛助会員 1 口 3,000 円 / 年  
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226  
口座名：市民アーカイブ

『ようこそ！市民アーカイブ多摩へ』  
出版記念シンポジウム 報告

## 市民活動資料を 収集・保存・公開する意味

―見えてきたこと・見落としてきたこと―

2021年2月23日 たましんRISURUホール



2020年3月に本会が刊行した冊子『ようこそ！市民アーカイブ多摩へ』——市民活動の記録を残す運動の歩み——は、当会15年の歩みを資料とともに提示すると同時に、収蔵するミニコミ総目録も兼ねて編集した。

ここから何を学べるか。市民活動資料や運動に造詣の深い3人の会員をお招きし、冊子から見えてくる将来に向けての課題を含めた対話を行った。(記録・町村敬志＝運営委員)

### 体験的アーカイブズ論

加藤一夫さん

(元国会図書館職員)

加藤さん

んは、国会

図書館、

アジア図

書館設立

運動、焼津

市での第五福竜丸の資料保存



などの経験を踏まえながら、市民アーカイブ多摩が直面する課題について指摘された。国会図書館では先輩から「本をモノとしてみるな。人間の知的営みの成果としてみるべきだ」という言葉を伝えられ、第一次資料としての本や雑誌を後世に伝えるのが、ライブラリアンの役割だということ学び、実践してきた。70年代には、60年代の運動資料(たとえばビラ)をどう扱うかが課題となっていた。模索舎の五味正彦さんたちの活動、アジア太平洋資料センターへと展開する鶴見良行さんらの実践にも言及されながら、とりわけアジアに関する資料を収集・保存することの意味について問いかけられた。そこには、ベトナム戦争や日本企業のアジア進出、さらに戦時中に日本が占領をし

たアジア諸国で図書館員が何を行ったのか、といった問いまでが含まれる。

加藤さんは市民アーカイブ多摩の活動について、活動の歴史に言及しながら、将来的に行きづまるのではないかと心配された。総花的な資料館、言わば「人民の文書館」として無限に拡大できるが、このままではパンクしてしまうのではないか。何らかの戦略が必要となるであろう。組織面でも、大学を含む地域との連携の重要性を、ご自身の経験も踏まえて指摘された。

### 「資料と向き合う」ということ

松井隆志さん(武蔵大学)

松井さん

んは、60年

安保闘争

などの歴

史を掘り

下げてい

く中で、『社会運動史研究』(新

曜社)をスタートさせ、本会の

取材のために市民アーカイブ

多摩を訪問された。そこで最

初に驚いたことが、「研究者が

研究のために使う」以外の使

い方が市民資料にはあるの

だ、ということだったという。

研究にとって都合のよい資



料の条件を考えると、明確な基準をもった合理的な収集方針、網羅性、内情のわかる一次資料などになる。

これに対し、市民アーカイブ多摩の資料は、さまざまな出会いを通して集まってきたものであり、欠号も多い。そこで市民アーカイブ多摩を「まちの古本屋」みたいなものとしたとえられた。目的の資料を探すには能率は悪いかもしれないが、通っている、その地域の様子がわかってくる。面白くないものも含め、こうやって歴史がつくられていくんだということがわかってくる。「こんなにいっぱい種類があるんだ」と、松井さんが率直に語られた言葉が印象



的だった。

専門とされる社会学的観察では、研究者自身の関心に集中してしまふ。一方、市民運動はそれぞれが置かれた論理のなかで活動しており、それらを広く理解するためには、活動を取り巻くさまざまな層について知る必要がある。市民アーカイブ多摩とその資料は「市民とつながっていること」に重要性があり、そのような手助けをしてくれる可能性がある。松井さんの報告は「能率」から離れることの意味」と名づけられた。そんな場をどう運営するか、課題も浮き彫りになった。

## アーキビストの視点から

平野 泉さん

(立教大学共生社会研究センター)



平野さんは、市民活動資料の保存・公開に携わる先達の立場から、アーカイブズの意義に関わるお話をいただいた。まず、ご自身にとってアーカイブズは、組織や個人が日常的な活動の中で、活動のために残したもののゆえ、日常的な活動とくっついていてるもの。言い換えると、活動の物語の中に置

かれたときに、それぞれの意味がわかるものと位置づける。また、アーカイブズは証拠としての力を持つために、途中の一部だけを改竄することが難しい。そして、アーカイブズは活動に関係ない人にはあまり見せたくないものを含むために、公開には配慮が必要となる。

市民アーカイブ多摩の歴史とは、市民のために資料を集め、保存する活動の歩みであった。モノとしてのコレクションを持ち続けると同時に、それを市民へとつなげる必要がある。こう語る平野さんは、コレクションの裏側にはさまざまな仕事の記録、アーカイブズがあることを指摘する。すぐに公開する必要があるが、コレクションにまつわるアーカイブズも保存する必要がある。法政大学に移管されたコレクションとのつながりも明確にしながら、市民の日常的な活動と密接につながりつつ、それを支えるものとして、アーカイブズは息長く生き延びていくことが大切であると指摘された。

## ◆会場から

市民アーカイブの活動について印象は。

加藤：市民アーカイブ多摩は

1つの運動。準備段階で議論を重ねたことが、継続につながっているのではないかと感じる。さまざまな活動を立体的に組み立てていくことでエネルギーが持続される。平野：イベントなどでどう利用者増に結びつけられるかを私も考えている。資料を使う人はなかなか来てくれないという悩みをもっている。

——ミニコミ発行につながる市民運動の背景には、60年代の学生運動の経験者がいたことも影響しているのだろうか？

加藤：60年代・70年代の運動の経験者が、いろいろなテーマをもつて地域に散らばっていったのは確か。障害者運動もその1つ。

松井：70年代初めまでを含めた活動の経験が、地域に根付いていったのではないかと支援される側が支援にまわるといった回路が地域で生まれた。70年代は運動の終わり」の時代と言われることもあるが、実際には70・80年代に大きな盛り上がりを見せた。

——公立図書館の関係者が、市民活動資料の保存の活動にあまり参加しない。

平野：イギリスでは地域の図書館が市民のアーカイブズに

## 市民アーカイブ多摩の四季⑧ 夏 酔芙蓉 スイフヨウ

力強い緑色を中心とした夏の原色の中、ここだけは淡い上品な雰囲気漂います。暑さで変わる色合いの変化に心奪われ眺めていると、いつの間にか自分の色も……



芙蓉は中国の植物名で本来はハスを指すのだそうです。唐の詩人白居易の長恨歌では悲劇のヒロイン楊貴妃の面(顔)と眉を太液池の芙蓉と未央宮の柳に例えて思い出します。発音を聞けば芙蓉は富、蓉は容に通じ、ふっくらとした女性の容姿を連想させるに十分ですね。日本で芙蓉といえば中国の木芙蓉すなわちフヨウ(アオイ科の灌木で中国原産と考えられる)



のことで、その品種の1つ、スイフヨウは酔芙蓉の意味で名づけられています。楊貴妃が酔うというのだから大変な名前です。夜中に咲き始める八重咲きの花は最初白色で、朝が来て温度が上がってくると、濃いピンク色へと次第に変化し、1日で盛りを過ぎてしまいます。秋深くなつて気温が上がらなくなると、長い時間白色を保ち、当日の白い花と前日のピンクの花が並んで咲いているのを見ることが出来ます。

(邑田仁・むらたじん)  
元東大小石川植物園園長

さまざまな資料を保存することに注力していたが、しだいにベストセラーを揃えてニーズに応えることが評価対象と見なされるようになった。認証アーキビスト制度も始まったが、ライブラリアンとの関係があいまいに見える。

——元図書館職員だが、市民アーカイブの整理をしている



と欠号や不揃いが気になった。でも、まずは後世につないでいくことの大切さを感じるようになった。

**松井**..保存されている資料がとびとびになっていること、穴になっているものがあるというこの大切さがあり、それを見ていくことも重要である。多摩がキーワード。

**平野**..住民図書館の資料の入力の際に苦労したが、あるがままを楽しもうという気持ちになると楽しくなる。こうした楽しさを伝えるためにがんばっていったきたい。

#### ◆参加者の感想から

・「砂川平和ひろば」では砂川闘争の原資料が手つかずの状態が残っている。多摩の貴重な財産、ぜひ一緒に整理・保存・閲覧への道を探してほしい。

・アーカイブズが図書館や博物館とつながり、資料が市民活動を支え、市民活動が資料を支えるような動きが起ることを期待する。

・市民活動の資料を集めるだけでなく、その価値について検討しなくてはならない時期に入ってきているのでは。

・若い研究者と80代の証言者(社会運動史)の体験にもとづく対話の必要性を感じる。

・ゲストや会場からの発言も、生きたアーカイブだと思う。

#### 私と市民活動資料 16

## アーカイブするということ — 未来の活動家や研究者のために —

中島保男(ジャカルタ・元ガルーダワルナ製版社長)



今回のシンポジウムに参加して加藤一夫さんの「体験的アーカイブズ論」を聞き、自分の活動が重なっていることに驚いた。

#### □「ベ平連」活動で見えてきた

東南アジアを知らない自分

私の始まりは「ベ平連」。京都での解散集会で私が「路地裏からアジアへ」と発言した後、参加していた鶴見良行さん(以下、良行さん)に呼ばれ、「俺は仲間とアジアの勉強を始めた。君は何をしようとしているの?」と問われたので「ベトナム反戦運動が終わって、見えてきたのは、東南アジアのことをいかに自分が知らなかったかという無念さ。東南アジアで暮らし勉強したい」と話した。

1976年、私は身につけてきた製版・印刷技術をインドネシア・ジャカルタの華人の工場で教え始めた。80年、自分の目指す製版工場を立ち上げて独立してから2016年に帰国するまで40年間ジャカルタで暮らした。

ジャカルタでは、製版・印刷技術をインドネシア語で教えるが働くのが精一杯で、日記を書くこともできなかった。会社を立ち上げると新しい技術を取得

し、教え、社員たちの生活を安定させるのに懸命であった。そんな暮らしの中でジャカルタに溶け込んでいった。社員からは「バベ(おやじ)」と呼ばれるようになった。

#### □アジアを記録し続けた

鶴見良行さん

良行さんは「アジア勉強会」「アジア太平洋資料センター」などで活動し、何よりも東南アジアの辺境を歩き、見て・記録していた。ジャカルタに来ると声をかけてくれ、仲間を交えて歩き、見たことを話してくれた。

私は、ジャカルタでの仕事や自分や社員の暮らしぶりを話した。私が日本に一時帰国すると、良行さんは自宅でフィールドノートや調査カードを見ながら話をしてくれた。50歳を過ぎた良行さんが東南アジアの海域を歩き、見て・フィールドノートを書き・撮影した写真が、『バナナと日本人』『マンガロープの沼地』『ナマコの眼』等の著作になつていく。

87年、インドネシア海域を仲間と木造船「ベニシイ」で航海する「ヌサンタラ航海」に誘われ、小学生の娘と2週間参加した。良行さんは、旅をしながら早朝から暮れに、前掛けのポケットにメモや領

収書や鉛筆を入れ、フィールドノートを書いていく。メモや領収書はノートに貼っていた。

#### □「丁寧な記録・整理」の意味

94年、良行さんは思いも寄らず68歳で逝ってしまった。まだ東南アジアを歩いた話を聞き、そこで暮らし人たちのことを教えてもらえると思っていたのに。

帰国して伏見のご自宅に線香を上げに伺った。奥様の千代子さんと話して「本や資料の整理、目録作りは、仲間や学生がしてくれませんが、写真、主にスライドが6万点あります。写真のデジタル化、私でもできますか?」とたずねられた。いろいろないきさつがあったが、私のジャカルタの工場に写真を送ってもらい、3年かけてデジタル画像化した。インドネシアのスラフがスキヤン作業をし、私が成果を確認。年代別に整理さ

れ簡易アルバムに丁寧に納められていたからできた仕事だ。

フィールドノートは、A4ノートに50冊ほどあった。手書き文書を入力していく作業は、インドネシアの言葉や地名、習慣が分かる人ということで、子育てがひと段落した妻の恭子が担当し、1年でデータ化した。何度か校正のやり取りがあったが、編集者を経て著作集がフィールドノートとして出版された。この作業ができたのも、ノートが丁寧に書かれ整理されていたからだ。

#### □未来に伝えるために

デジタル化した写真は埼玉大学を経て、立教大学共生社会研究センターに所蔵され、帰国した際にその成果を見せていただいた。大量な資料の集積に感心したが、アーカイブの意味がピンとこなかった。

シンポジウムに参加して「発見」があった。良行さんの調査カード、フィールドノート、写真は、良行さんの著作や大学の授業のためだけではなかったのだ。これからの研究者、活動家に使えるように整理していたのだ。

写真のデジタル化、文章の入力を手伝ったのに、この作業こそがアーカイブズであることに、今回のシンポジウムに参加して、初めて気がついたのだ。ごめんなさい。

(なかじま・やすお) 会員



鶴見良行・千代子(1988年7月)  
インドネシア・ウジュンパンダン

## ニ二 コミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信（ミニコミ）を、発行者の方に紹介していただきます。

## 日野・子どもと本の出会いの会ニユース

### ◆会のはじまり

「開かずの間」と言われ続けてきた学校図書館。学校図書館法でその重要性を謳っていないながら、司書教諭や司書の配置は「当分の間置かないことができる」という1項で、戦後何十年も行政の怠慢を許してきたのです。子どもの学びを図書や資料を活用した豊かなものにしうといふ多くの先人達の努力で、初めて非正規ながら学校図書館嘱託員制度ができ、1990年に専任の職員が日野市内全小中学校に配置されました。「学校司書」東京都第1号です。

鍵の開いた図書館は見違える

### ◆活動の柱

多くの人に子どもの本の素晴らしさを知ってもらいたいと、「子どもの本まつり」と称して、春の講演会と、お話をメインにした秋の本まつり実施を活動の2本柱にしました。

94年、第1回「子どもの本まつり」を開催。主旨に賛同してくださった作家・古田足日さんの講演の成功をもってスタートし、その後も毎年、日本を代表するあこがれの児童文学者や研究者においでいただけてきました。

### ◆「ニユース」は会の血液

会名と同じ『日野・子どもと本の出会いの会ニユース』は発



- ・1994年創刊、約100部、A4判、2頁、月1回発行
- ・年会費：2000円
- ・tel：042-592-2019（加藤）
- ・当館所蔵：141号（2007.3）～▽312号内容＝短歌、定期総会と6月例会のご案内、絵本紹介『カラスのいいぶん』、2021年度のスタートにあたって、本の紹介・最近読んだ本の中から『屠畜のお仕事』『むこう岸』『星空の人形芝居』

## はんげんぱつ新聞

『はんげんぱつ新聞』は、1978年5月の創刊から43年が経ったところです。毎月、1回も休むことなく発行してきて昨年に500号を超えました。発行主体は、「反原発運動全国連絡会」と名乗っていますが、もともと『はんげんぱつ新聞』（創刊から93年9月までは『反原発新聞』）の発行を主目的として結成されました。新聞発行を軸に、全国各地の反原発・脱原発をつなぐネットワークです。

足以来毎月欠かさず発行し、この7月で313号になります。構成は、タイトルに続き季節の短歌とイラスト、当月定例会の案内、会員による最新刊本の紹介、前月定例会などの報告・連絡・提案、講演会や学習会の記録等。日頃定例会に参加できない会員にとっても見逃すことのできない中身で、まさに「会の血液」となっています。

### ◆本会の今後

間もなく発足から30年。スタッフの高齢化は悩みの種です。今後どんな形でなら活動を続けていくことができるかと昨年の夏から検討を続けているところ（小島義範）です。



創刊当時は、地域のさまざまな動きが地元の新聞に大きく載りますが、すぐ隣の県の新聞にほとんど報じられないという状況がありました。

そこで各地の地元紙の記事を集め、各地の人びとがお互いに大切な情報を知り合えるようにする通信がつくれないうかという話が、75年8月に京都で開いた第1回の反原発全国集会の際にもちあがりました。それから2年余、地元紙の記事に頼るのではなしに、各地の人が自ら記事を書いて自分たちの新聞をつくる。そうすることで各地の経験を交流し反原発運動の連帯をと話がふくらんで、78年に『はんげんぱつ新聞』が創刊されたのです。

今ではインターネットの普及により、私たちは即座に世界中からの情報を得ることができま

しろ「旧聞」かもしれません。いまだに紙で出しているの？」との声も聞かれます。B4判4ページの月刊紙は、情報の早さでも情報の量でも、時代から取り残されているように見えるのでしよう。しかし、言い換えれば、早さや量に振り回されることなく、本場に必要情報あるいは必要な情報を得るためのヒントを、月1回の小さな紙面からこそ落着いて提供できると、私たちは考えています。

もちろん、時代に合わせて『はんげんぱつ新聞』の役割も変わっていくことが望ましい姿です。『はんげんぱつ新聞』には、現在、国内の各地域に19人の編集委員がいて、まわり持ちで番号、どこかの地域の編集委員が企画に加わっています。地域の見方・考え方が必要かを見出し、少しでも役に立つ『はんげんぱつ新聞』になろうとしています。（西尾漢）

- ・1978年5月創刊、2300部、B4判、4頁、月1回発行
- ・年間購読料：3000円
- ・tel & fax：03-5358-9792
- ・当館所蔵：465号（2016.12）～▽517号内容＝東海第二原発運転差し止め、「核ゴミ問題を考える北海道会議」が設立集会、月間情報2021年3月、反原発講座、DATA BOX 他



## 市民アーカイブ多摩の 資料棚から ⑭ 〈アジア・太平洋戦争〉

市民アーカイブ多摩には多くのミニコミがあるが、その中には戦争と平和に関するもの（分類番号20番代）がある。その中でも、「アジア・太平洋戦争」関連のミニコミが、管見の限りで40種類以上ある。ただし、団体の事情によって終刊を迎えたものや、統合されたものも含む。

### 〔分類して見えてくる課題〕

分類番号としては20番に一緒に入ってしまった「アジア・太平洋戦争」関連だが、それぞれの中身によって当館で保管されているものを分類してみた。（カッコ内は当館所蔵ミニコミ数）

- ①戦争遺跡（6）／②戦後処理（19）／③反核兵器・ヒロシマ・ナガサキ（7）／④「慰安婦」問題（4）／⑤平和博物館・平和美術館・平和文書館・平和図書館（10）／⑥空襲被害（4）／⑦国際法違反、生物・化学兵器（9）／⑧戦争犯罪・虐殺など（3）／⑨反戦・非戦（3）／⑩戦争体験・戦後抑留問題（3）と、10の内容に分けることができた。

意味の大きさがわかる。たとえば『もうひとつの歴史館・松代「運営委員会ニュース」』（210）273号所蔵は、1990年代から朝鮮人「慰安婦」の家を保存する運動を続けてきたが、名前を変えて活動を継続しながら歴史館開館にこぎつけている。

②の1つ『遺棄毒ガス中国人被害者を支援する会ニュース』（1〜22号所蔵）を読むと、旧日本軍が中国大陸に遺棄した毒ガスによる被害者の存在を知ることができ、現在にもつながる多様な問題と絡んでいることがわかる。

③の1つに『原爆の図 丸木美術館ニュース』（86〜142号所蔵）がある。この場合、丸木美術館での取り組みを通してであるが、さまざまな立場から広島・長崎の原爆被害の重大さを改めて知ることができると。

④『ロラネット・ニュース』『戦争と性』『wan だより』等からは、慰安婦問題が今なお未解決、かつ現在進行形の問題であることがわかる。

⑤では多様な資料を保存する、それぞれの場からの発信を

把握できる。たとえば『ノーモア・被爆者通信』（3〜50号所蔵）50号では、原爆被害者調査資料の整理の様子が描かれている。

⑥の『平和の港』『草の家だより』などから、各地の空襲記録がまだまだ不十分であること、きちんと記録する重要性が見えてくる。

⑦⑧⑨からは、可視化されて



いない生物・化学兵器が有する問題の深刻さや、証言が大事な証拠である虐殺・戦時性暴力の問題、そして戦争が個人に対していかなる影響を与え続けているのか痛みを伴いながら伝わってくる。

⑩は、戦争の問題を展示会や慰霊祭の形で記憶にとどめてい

ることを伝えている。たとえば『ヒロシマへ ヒロシマから』通信（1〜261号所蔵）は、元高校教師の発行者が退職後も広島に足を運び、被爆体験の聞き取りを行うだけでなく、戦跡をめぐるフィールドワークの企画・運営もしている丁寧な記録だ。

### 〔貴重な通信をつなげる〕

当館所蔵の戦争関連のミニコミを取り上げてみた

が、たとえばミニコミに現れた世界はアジア・太平洋戦争のフィールド全域からすれば一部でしかない。旧植民地（韓国など）や激戦地（中国やフィリピンなど）の事例はあるものの、アッツ島など「玉砕」の地について発行されているミニコミは当館にはない。

また、被害を受けた側だけではなく、戦った人々に関するミニコミも存在する。戦友会の通信なども所蔵していない。

最後に戦争関連のミニコミが抱える課題を挙げてみる。1つに市民団体の側がミニコミを集約させなければならないという問題が起こっている。たとえ

ば、『遺棄毒ガス中国人被害者を支援する会ニュース』は別々の地域で起こった事故をきっかけに立ち上がった団体が、時間の経過の中でミニコミを集約させてきた。単独では活動しにくいという難しい事情があるのだから。

世代間継承の問題もある。高齢化で、団体を維持できないことから、ミニコミを終刊する動きも出ている。敗戦から時間を経過すればするほど、今後終刊せざるを得ないミニコミは多くなるのではないかとと思われる。

しかし、アジア・太平洋戦争の終結から75年以上の時間が経過してもなお、市民の手によって関連するテーマのもとにミニコミが刊行されていること自体、戦争の傷跡の深さを改めて物語っている。

駆け足で紹介したが、ミニコミ1つひとつが語ることから学ぶことは大きい。それぞれを読み込み、分析すること。そして全国各地にある戦争関連のミニコミのリストのようなものをどこかで集約できないか、とも思う。

まずはぜひ、市民アーカイブ多摩へ気軽にミニコミに出会いに来ていただき、平和とは何かを一緒に考え合いたい。

（中村修 運営委員）

# 第7期 緑蔭トーク報告

第1回 4月24日  
「沖縄は大変ですね」と  
言われたくない3つの理由  
平良愛香さん(日本キリスト教団川和教会)

三線を弾きながら島唄の披露で講演が始められた。次に模造紙に書きされた南西諸島の図を示しながら、琉球弧の地理と歴史についての話から、本題である「沖縄は大変ですね」と言われたくない3つの理由について語られた。



## ◆本当のこと知ってる？

九州島から台湾島までの1300kmの海上に188の島々、それが琉球列島。沖縄といっても沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島がそれぞれ、独自の歴史と文化をもっている。方言も違っている。14世紀後半、沖縄島に3つの小国が起り、15世紀には統一琉球王国として日本とアジアの国際都市として賑わっていた。

リゾート地として「沖縄いいですよー」と言われると「基地がなければね」と答えている。辺野古や高江の戦いが知られるようになる「沖縄は大変ですね」と言われることが増えた。「共に憂えていますよ」という賛同の意思表示と分かるが、平良さんは困惑し、不快に思うことがあったという。その理由を分析すると3つある。

## ◆大変なのは誰のせい？

2つには、「誰のせいだと思っているの？どこに立って言うてるの？」という憤りがある。

1つは、「どれぐらい大変か、本当にわかって言ってるの？」という疑問。たとえば1996年から始まった辺野古の座り込みは、非暴力を貫いているのに、暴力で対応されることが日常茶飯事になった2004年以降に報道された。オスプレイ墜落の米軍報道はcata (墜落) だったが、日本の報道は「不時着」となっていた。報道はほんの一部で、しかも正確とは思えない。マスコミが報道を自粛したら、沖縄を他人事のように感じるようになってしまっているのではないかと憂慮している。

## ◆他人事ではない大変なこと

3つには、「日本こそ大変なことになっているけど、気づいていますか？」という困惑がある。戦争ができる国になるために、乱暴な手続きで法律が生まれている日本。マスコミも叩かれることを怖れて政府批判をしない。現実を起こっていることが隠されている。ブレーキをかけるシステムが機能不全に陥っている。

沖縄県の面積は日本の国土面積の0.6%だが、沖縄県の米軍専用基地面積は日本の米軍基地面積の70.6%にもなり、自治体の半分以上が米軍基地の嘉手納町のような町もある。1972年の復帰後、日本本土の米軍基地は半分以上に減ったが、沖縄はほとんど減っていない。平和憲法を持つ国に戻れば米軍基地から解放されると信じた沖縄の民意は裏切られてきた。なぜ沖縄に基地が集中しているのかといえ、東アジアをにらむ戦略的位置にあつて、日本政府の「思いやり予算」によって基地の恒久化が進められているから。「植民地」のように扱われている社会構造の中で、差別されてきたという思いがある。今始まったかのように「沖縄は大変ですね」と言われると、「誰のせいだと思ってるの？」という憤りが生まれてしまう。

ている。

そうした状況の中から辺野古での基地建設阻止行動をしていた女性が、大阪に戻って「沖縄の基地を引き取る会」を始めた。軍事的・防衛的な理由ではなく、嫌なものを沖縄に押しつける差別と確信しての行動だと思ふ。このような動きは全国に広がっているが、沖縄問題は、沖縄問題ではなく日本の問題でもある。自然豊かな沖縄を観光で訪れてほしい。その時は是非現地の新聞を読んでもらいたい。

講演後の質疑応答では、参加者自身の沖縄に対する思いと体験、人を通しての沖縄との関わりなどが具体的に紹介された。それは沖縄で現に起こっていることは、わたしたち自身の問題であることが講師によって伝えられたことから生じた結果である。

（記録・鈴木清隆＝運営委員）

◆第3回 7月24日(土)  
ダメ元はダメじゃない！  
おばちゃん達の映画づくり大作戦  
羽村幸子さん  
（映画「みんなの憲法制作者」）

◆第4回 9月25日(土)  
橋本義夫とふだん記  
—探求と記録の生涯—  
鈴木清隆  
（ネットワーク・市民アーカイブ）  
・会場：市民アーカイブ多摩  
（立川市幸町5-96-7 8頁地図）  
・時間：午後4時15分～6時  
・参加費3000円  
・定員20人（申込み先着順）  
・申込み042(5440)1663  
・E-mail:simn-siryu@nifty.com

## 岸中書庫 ～書架を運びました～

古書店からいただいた高さ2m以上の書架(写真右上)をレンタカーで運搬し、修理を終えた岸中書庫(写真右下)に運び込みました。現在は書架の組み立ても始まっています。(詳細は次号にてご紹介します)





## 来館者から①

# 障害者支援の研究に取り組んで

加藤 旭人

一橋大学大学院



私の専門は社会学／障害学で、東京都多摩地域の障害者運動について研究を続けています。今回は、そうした調査について、とくに新型コロナウイルス感染症との関わりも含めて紹介しようと思います。

## ●重症化リスクと自由の間で

障害者支援の現場は、感染拡大の影響にいち早くさらされました。私の関わっている障害者の地域活動は、月2回土曜日に音楽・スポーツ活動、外出などを行っています。感染拡大がより話題となり始めた2020年2月末に予定していた外出活動から、社会情勢や行政によるガイドラインなどを踏まえた上で、主催者として前日に中止判断をしました。障害者の重症化リスクが高いこと、介助を含めた身体接触を避けられず、その担い手が初めての参加者を含めたボランティアであることも大

きな要因でした。

活動が再開したのは7月のことで、現在では様子を見ながら断続的に活動を続けています。重症化リスクが高い障害者にとって、生活の安全性は極めて重要です。他方では過去の障害者運動が厳しく指摘してきたように、「安全性の管理」という理由から生き方を大きく制約されてきました。両者のバランスをどう取るのが、今の課題となっています。

## ●目の前の課題への向き合い方

個人的には研究の中心を活動への参加から資料を読むことへと移し、緊急事態宣言が解除された20年6月に市民アーカイブ多摩を訪問し、「くじら雲」という団体の会報を改めて読んでみると、「インクルージョン」、「地域」、「グループホーム」といった今となつては使い古された言葉が、90年代当時において希望とともに語られていることに改めて気がつきました。さらに「くじら雲」を調べるために、法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズと連絡を取ったところ、6月22日から新たに郵送複写サービスを開始、7月1日から閲覧を再開しており、郵送複写を利用することで資料を入手し、研究を進めることができました。

した(環境アーカイブズは、4月1日から業務を停止していた)。

私にとってミニコミを読むことは、現在の活動が置かれた厳しい状況から少し目線を移すこと、そして現在まで続いている活動の原点を見直す契機となりました。ミニコミを読むという選択は状況に対応した消極的な営みでしたが、実際に作業を進める中で、人々が当時は現在進行形であった当時の課題といかに向き合ったのかを知ることが

できる、今自分がどうしたらよいかを考えることができました。

すぐに今の状況に応用できるような正解はありません。けれども、自分には真似できないような立派な答えよりも、等身大の姿にこそ受け継ぐべきものがあります。そうした1つひとつの経験からつづさに学びながら、研究を続けていきたいと思っています。

今回の出会いをきっかけに12

## ネットワーク・市民アーカイブ2021定期総会報告

## 新書庫整備と参加の仕組みづくり

5月23日(日)、2021年度定期総会を開催しました。

いかに組織基盤を強化し、具体的な展望を見いだすかが、ここ数年の当会の懸案でした。今年の総会では、コロナ禍での開館の維持や組織運営方法などに例年以上に、労力を割いたこと。絶えず市民活動資料が届けられることに励まされ、知恵と勇気を得ながら、活動を止めることなく取り組みました。来館者数が例年の2倍以上と飛躍的な増加と、新たな書庫(岸中書庫)の確保という嬉しい報告もありました。

2021年度は、この進展を踏まえて、新たな人員(会

員・運営委員・当番・ボランティアなど)の確保、そして組織(事務局体制)の強化、岸中書庫の整備などに引き続き取り組み組んでいく方針と会員から提起のあった行政への働きかけや、新たな目録作成、他組織とのネットワークについて検討することが確認されました。



拡大運営委員会は毎月第3金曜日の19時～21時。正会員の傍聴参加を歓迎しています。

また、運営委員会の他に、資料部会・広報部会・企画部会なども動いており、会員であれば

月から環境アーカイブズでRA(リサーチアシスタント)として勤務しており、「東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー所蔵資料」の整理を担当しています。

両方の施設でミニコミを読むことができたのも、発行した人はもちろん、それらを残し・整理した人がいるからです。私自身もこうした作業に加わりながら、その経験を伝えていこうと思っています。

加藤 旭人  
より多くの方に関わっていただくことが「市民アーカイブ」の本旨でもあると思っています。  
今年度も一緒に、よろしく願います。

# アーカイブ多摩日記

## ◆「岸中書庫」誕生

昨年度から緊急度が増してきた資料の保存場所について、現在の市民アーカイブ多摩と同じ敷地内にある小部屋をNPO法人グリーンサンクチュアリ悠さんから貸しただけのことになりました。同法人の初代理事長の岸中友子さんが資料室に使っていた部屋で、「岸中書庫」と名づけました。14㎡ほどですが、別荘地のような緑地が目の前に広がります。真如苑市民活動助成を受けて建物修理や整備を進め、秋にはお披露目できる予定です。

## ◆スチール書架ありがとう

前号の本欄を見てくださった読者の方から、ご近所の古書店閉店により書架が不要になるとの情報をいただきました。古書店の皆さんをはじめ、会員やボラン

ティアのご協力により、書架の解体・運搬・組み立て作業に取り組んでいます(6頁参照)。

## ◆2020年度実績データ 来館者数が大幅増

当総会で報告のあった20年度事業実績のうち、データを一覧ご紹介いたします。コロナ禍により、予約来館をお願いするなどのご不便をおかけしましたが、多くの方にご来館いただきました。

- ①開館日71日。
- ②来館者数 200人。
- ③データ入力数 5437点。
- ④新作成ファイル数81タイトル。
- ⑤ミニコミファイル総数 1917タイトル。

## ◆寄贈継続のお願い

今年度も資料の継続寄贈をお願いいたします。会員として支えてくださる方、整理ボランティアも募集しています。ミニコミを整理しながら触れていると生きる力と知恵が湧いてきますよ！

## 運営委員会など

- 2月21日 第11回運営委員会、参加者8人。会員・カンパ者、当番確認、来館者報告(毎回)。助成金確保に向けて、出版記念イベント役割分担、新書庫確保検討、20年度活動振り返り、21年度事業検討他。
- 2月23日 「ようこそ！市民アーカイブ多摩へ」出版記念イベント。参加者35人。
- 3月7日 第3回資料を探る会。参加者5人。
- 3月10日 法政大学環境アーカイブズ来訪・意見交換。参加者8人。
- 3月20日 第12回運営委員会、参加者7人。20年度各部会の反省と次年度に向けて総会議案書検討、新書庫整備計画、出版記念反省会他。
- 4月5日 書庫運搬。参加者7人。
- 4月16日 第1回運営委員会、参加者6人。総会議案書最終確認、運営委員会体制総会・記念講演会・緑陰トーク役割分担。
- 4月24日 第1回緑陰トーク。参加者12人。
- 5月7日 第2回運営委員会。参加者7人。総会・記念講演会開催方法検討。岸中書庫命名と整備手順確認。緑陰トーク振り返り。
- 5月23日 2021年度総会(参加者15人、記念講演会同34人)。

## 会員数(2021年5月)

162(正会員60人)

賛助会員99人・3団体)

## ◆新規入会ありがとうございます

正会員 門田耕作さん  
賛助会員 葛西利武さん  
鈴木俊夫さん 麓 常夫さん  
ひろばの会さん(秦野市)

## カンパありがとう

(2021年2~5月)

新井勝統さん 柏木 実さん  
駒田和幸さん 後藤祥夫さん  
柴田隆行さん 鈴木美和子さん  
住田啓子さん 坪井研治さん  
富窪高志さん 丹羽雅代さん  
中村光一さん 野崎忠郎さん  
平野 泉さん 堀内寛雄さん  
松井隆志さん 松鶴光子さん  
三浦 健さん 吉田美子さん  
渡辺 樹さん 匿名4人  
マスコミ文化・九条の会  
八郷米の会

## 会員の声

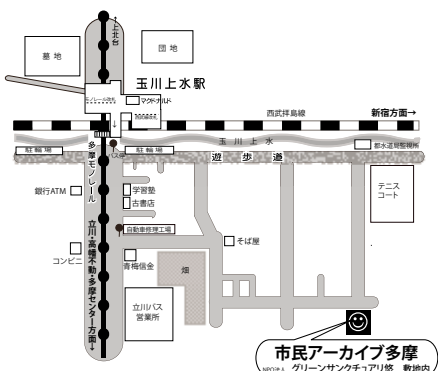
・『ようこそ！市民アーカイブ多摩へ』の巻末にある所蔵ミニコミの目録は字が小さくて見にくいのと、分類順・発行者順のみのためタイトルで探しにくい。タイトル順のリストを別に出すことはできないでしょうか。ご検討ください。

・一年余りにわたるコロナ禍の中、希望に満ちた未来を想像したくなる活動報告がありとつぎやりました。

・昨年の企画に参加した砂川闘争地を巡ったのは楽しかった。数日間は、興奮が収まりませんでした。

## 編集後記

総会も終わり、岸中書庫の整備など、新たな取り組みも始まりました。これからより多くの方と一緒に活動していけたらと思う。どんな形でも良いので、新風お待ちしています。(鈴・江・佐・増)



## 【市民アーカイブ多摩利用案内】

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(8月中旬・年末年始の休館あり)
- ・開館時間：午後1時~4時 ・入館カンパ：100円~
- ・所在地：東京都立川市幸町5-96-7  
(多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分)
- ・tel & fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ(通信や会報など)1,900タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。  
[www.c-archive.jp](http://www.c-archive.jp)